古代アメリカ学会会報

第 22 号

スペイン・セヴィーリャ・コロンブスの棺

目次

◆会員からの投稿
◆第 12 回大会アナウンスと発表者募集
◆『古代アメリカ』の原稿募集
◆役員会報告
◆新入会員
◆事務局からのお知らせ

2007 年 7 月

＊本稿掲載文・写真の無断転載・複製を禁じます。

ビルカバンバへの道

坂井正人（山形大学准教授）

アンデスの勉強を始めた頃、オランダ生まれの人類学者 Tom Zuidema の著作に魅了された。晦渋な英語で書かれているため読むのに骨が折れた。しかし、インカの首都クスコの景観に書き込まれた情報が次々と「解読」される様は壮観であり、それはあたかも古代文字の解読作業のようであった。

インカ時代のクスコには、太陽神殿コリカンチャを中心として放射状に分布する 300 ヶ所以上の礼拝所（huaca）が存在した。この礼拝所の配列に、天文暦や王家に関する情報が組み込まれていたというのが Zuidema の主張である。つまり、紙の上に文字を使って情報を記録したのではなく、礼拝所を建設することによって景観に情報が刻み込まれたのである。

文字は今から約 5､000 年前にメソポタミアで発明され、収穫物や家畜の数を管理し、王朝史を記録するために用いられた。エジプト、インド、中国、中米でも後に文字が使用されたが、その目的はメソポタミアと非常によく似ている。ところが、これらの情報が都市の景観等に記録されたため、南米アンデスに成立したインカ帝国では、文字が必要とされなかった。

その後、クスコ周辺に分布する礼拝所が調査され、必ずしも Zuidema の主張どおりではないが、礼拝所の中には天体の運行にもとづいて設定されたものが含まれていることが分かった。

ただし、クスコ中心部にあった礼拝所は、植民地時代に大部分が破壊されていた。そのため、インカ時代のクスコの景観を復元することは不可能であり、Zuidema が主張するような情報が書き込まれていたかどうかは不明である。

クスコの中心部には、歴代のインカの王宮が軒を連ねていた。その姿は、インカによって滅ぼされたチムー王都とよく似ているため、両者はしばしば比較されてきた。

修士論文を執筆する際に、チムー王都を研究対象として、そこに組み込まれた情報を解読できないだろうかと私は考えた。王都の詳細な地図が 1970 年代にすでに作成され、考古学調査も行われていた。そこで、これらのデータを分析したところ、王都に記録された「王朝史」とその編集プロセスについて新たな知見が得られた（Sakai1998，坂井 2003）。その後、同様のアプローチでナスカの地上絵（坂井 1996，Sakai y Akojima eds. 2007）や形成期神殿リモンカルロ（坂井 2007）についても研究している。

チムー王都とナスカの地上絵について共通して言えることは、主要な建物の配置が、周囲の山の方向を基準に決められたことである。この観点からインカの首都クスコを再検討したところ、首都周辺に分布する聖なる山々を基準として、太陽神殿コリカンチャが設定されたことが判明した。これらの聖山はインカの起源神話や成人儀礼に登場する。

クスコは 16 世紀にスペイン人によって占領された。インカはアンデス東斜面の森林地帯に、ビルカバンバという新都を建設して、その後 35 年にわたって、ここがインカの首都として機能した。

ビルカバンバは現在エスピリトゥ・パンパという名前で知られている。この遺跡を私は 2005 年より調査している。ここを調査対象として選んだのは、長年にわたって森林におおわれていたため、人為的な破壊がほとんど見られないためである。当時の景観を復元することができれば、最後のインカがビルカバンバに書き残したメッセージを読み解けるかもしれない。また、スペインの植民地都市に改造されたクスコに代わって、ビルカバンバで Zuidema の主張の是非を検討できるかもしれない。

新都ビルカバンバにおける本格的な分布調査は、これまで十分には行われてこなかった。2005～2006 年度の調査（註 1）では、遺跡全体を踏査して遺跡の範囲を把握した上で、その内部に分布する建物の平面図と 3 次元図面を作成した。これらの図面を作るために、トータル・ステーション(光波式測距測角儀）による測量を実施した。またこれらの図面を既存の地形図の中に組み込むために、GPS(Global Positioning System 全地球測位システム)を利用した。

遺跡踏査の結果、ビルカバンバは東西約 3 キロ、南北約

写真 1　密林地帯に分布するビルカバンバ　　©坂井正人

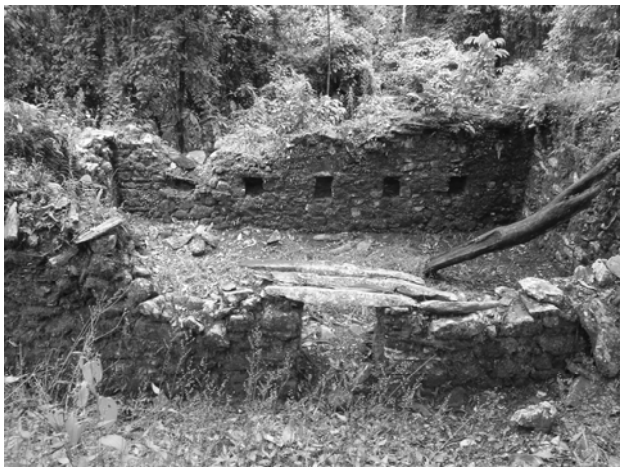

写真2　ニッチのある部屋　　©坂井正人

写真3　大石　　©坂井正人

1.5 キロの範囲に広がり、そこに 300 以上の建築物が分布していることが確認できた。遺跡の付近には樹木が生えており、それによって建物の一部が崩れかけているが、遺跡の保存状態は比較的良好である。

ペルー文化庁の許可を得て、樹木の一部を伐採した結果、ビルカバンバの都市プランが旧都クスコと類似していることが判明した。遺跡の中核地区には広場、基壇建築物、部屋状構造物（写真 1, 2）、大石（写真 3）が分布しており、クスコの儀礼活動の中心であった「太陽神殿」と非常によく似た建物もある。また付近には水路や階段状の農地（写真 4）があり、隣接する丘の上に展望台が確認できた。また山の斜面には円形と方形の構造物が分布しており、居住区の可能性が高い。

今後、ビルカバンバの景観図（建物の配置および周囲の地形図）を完成させた上で、建物の分布規則を検討することによって、この都市に組み込まれた情報の解読に努めたい。

写真4　階段状の農地　　©坂井正人

（註 1）

2005 年 10 月 25 日～12 月 7 日および 2006 年は 10 月 17 日～12 月 11 日に現地調査を実施した。この調査には Gladys Lagos Aedo(国立クスコ大学準教授)、 Ismael Uscachi Santos（クスコ文化庁）、福原弘識（愛知県立大学大学院国際文化研究科博士後期課程）、宮野元太郎（Boston Architectural College）が参加した。

（引用文献）

坂井正人

1996 「古代ナスカの空間構造：観測所、山、祭祀センター、居住センター、地上絵」『リトルワールド研究報告』13:37-55。

2003 「チムー王都の空間構造：先スペイン期アンデスにおける情報の統御システム」角田文衛・上田正昭監修 『古代王権の誕生』2:247-265、角川書店。

2005 「景観の創造と神話・儀礼の創作：インカ帝国の首都クスコをめぐって」関雄二・木村秀雄編『歴史の山脈』国立民族学博物館調査報告、55:49-63。

2007 「ヘケテペケ下流域における形成期神殿と社会の動態：リモンカルロ神殿の発掘およびペルー北海岸一般調査より」 加藤泰建編『先史アンデス社会の文明形成プロセス』平成 14-18 年度科学研究費補助

金〔基盤研究(S)〕研究成果報告書、183-214。
Sakai, Masato
1998 *Reyes, Estrellas y Cerros en Chimor: el proceso de cambio de la organización espacial y temporal en Chan Chan.* Editorial Horizonte.
Sakai, Masato y Isao Akojima (eds.)
2007 *Estudio Preliminar de las Líneas y Geoglifos de Nasca: una investigación interdisciplinaria.* Facultad de Literatura y Ciencia Social, Universida de Yamagata.

パルパからナスカへ―古代パラカス人の移動に関する新たな考察

楠田枝里子

(1)

世界遺産「ナスカの地上絵」でよく知られる、ナスカ文化研究は、今や更に興味深い局面を迎えている。ドイツ考古学研究所の Dr. Markus Reindel を中心とするナスカ・パルパ・プロジェクトにより、新たな遺跡の発掘と解析が飛躍的に進み、90 年代に発表された種々の学説でさえ、すでに否定されたり、訂正を必要とされている。ナスカ・パルパ研究は次なるステージへと進化を遂げているのだ。

紀元前、パルパに居を構えていたパラカス人は、何らかの理由でナスカ平原への移動を余儀なくさせられ、そこにナスカ文化を花開かせたことは、昨年の会報に記した通りである。このことから、「ナスカの地上絵」をはじめとするナスカ文化の、源流としてのパラカス文化の研究が注目されていることも、すでに述べた。

パラカス人はなぜ、ナスカへと移動をしなければならなかったのか・・・。様々な理由が推測される。

この一帯の乾燥化が進み、深刻な問題となっていたことや、一方で突発的な大洪水による破壊にも悩まされていたらしいことが、知られている。人口の増加に伴い居住空間を広げる必要が生じていたとか、大きな気象変動に伴って何か疫病のようなものが発生し、生き残るためには生まれた土地を離れざるをえなくなったということも、考えられるかもしれない。

しかし、2006 年 9 月、ナスカとパルパを巡りながら、私はもうひとつ、これまで言及されることのなかった、大きな要因に着目した。

それは、地震である。

(2)

プレートテクトニクス（プレート理論）によれば、この地球の表面は、十数枚のプレートによって覆われている。プレートは、平均 100ｋｍほどの厚さの固い岩板で、その下のゆっくりとしたマントル対流に乗って、移動している。プレートとプレートがぶつかったり、ずれたりする境界部分では、火山や断層などの地殻変動が起こり、そこで地震も発生するのである。

「図１」のように、太平洋を広くカバーするのが、太平洋プレート。その西側に位置するフィリピンプレートは、北は北アメリカプレート、西はユーラシアプレートと複雑に接しているため、ちょうどその境界にあるわが国日本は、地震大国となるわけである。日本と同じく、環太平洋地震帯に属する国のひとつであるペルーでも、地震が頻発している。ペルーの太平洋岸に沿って、太平洋プレートの東に接するナスカ・プレートが、南米大陸をカバーする南アメリカプレートの下に潜り込んでいくのである。

境界線に沿って、活断層が走り、地震が集中して発生する。最近の記録でも、2000 年ペルーで記録された地震数は 101（うちマグニチュード Mag.5 以上が 9）、2001 年は 118（Mag.5 以上が 21）、2002 年は 102（Mag.5 以上が 10）、2003 年は 129（Mag.5 以上が 11）となっている。

記憶に新しいところでは、2001 年 6 月 23 日のペルー南部地震が例にあげられるだろう。Mag.8.3 のこの地震により、アレキーパ、モケグア、タクナ、アヤクチョの 4 県、が大きな打撃を受けた。

死亡者数 77、行方不明者 68（おそらく死亡者と推定される）、負傷者 2713、被害者数は 213430 人にも及んだ。家屋の損壊は 33570 戸にも及び、全壊は 25399 戸であった。歴史的な建造物も、例外ではなかった。地震のあとの津波によっても、海岸地帯の町々が深刻な被害を受けた。

しかしアレキーパ一帯が地震の被害に見舞われるのは、これが初めてではない。この地域には、活断層が複雑に入

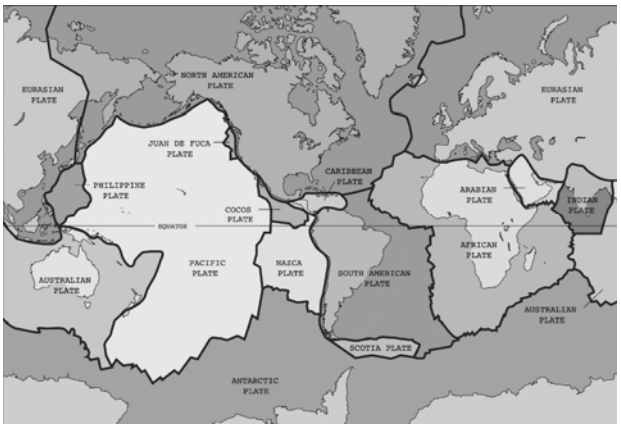

図1 世界のプレート地図

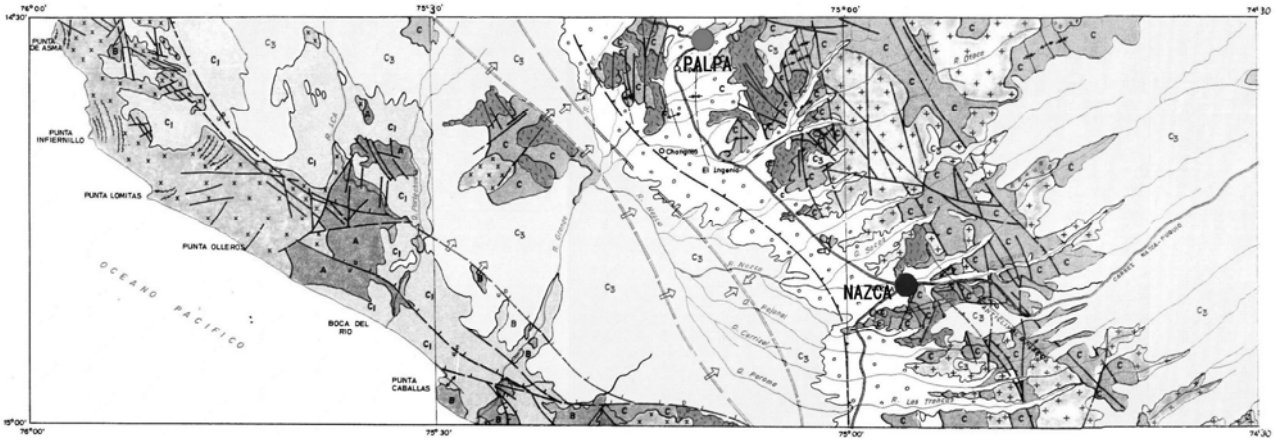

図2 パルパ・ナスカ一帯の断層地図

り組み、過去にも何度も、大地震に襲われた記録がある。そして、ナスカもまた、その地震多発地帯のひとつなのである。

ナスカ近辺の詳細な断層地図を入手した。「図２」で明らかなように、パルパの西側から、ナスカへと、数多の断層が走っているのが見える。このラインに沿う一帯で、多くの地震が起こったことが、容易に推測できる。

1996 年のナスカ地震をご記憶だろうか。11 月 12 日午前 11 時 59 分、マグニチュード 7.3 の地震であった。メルカリ震度は 7 を記録し（場所により震度 8 に達した）、5000 平方ｋｍにわたって、被害を受けた。この一帯は基本的に厳しい乾燥地帯で、大都市でもなければ、さして大きな建造物もない。住民の住まいの多くは、草木を組み合わせた掘っ立て小屋か、せいぜいアドベ煉瓦で作られた簡素なものだったが、それでも、15 人が死亡、負傷者は 585、被害者数は 66420 人にも上った。住居は 3868 戸が全壊し、その他被害は 9891 戸に及んだ。76 の学校や 7 つの保健所も被害を免れなかったという。ナスカの町の中央広場に面した博物館は地震で破壊されたまま、取り壊され、2007 年 1 月現在も、再建されてはいない。

しかし、アレキーパの例と同じく、ナスカを大きな地震が襲ったのは、この時だけではないのだ。

その前には、1942 年 9 月 27 日に、大地震の記録が残されている。マグニチュード 8.2。夕方 3 分間にもわたって揺れ続け、電気も、電話も、電信も切断されたという。これに続き、夜から朝にかけて 15 回もの強い余震があり、朝の 4 時には、最悪の状態にあった建物のほとんどを破壊しつくした。この大災害に耐えうることのできた建物はひとつもなかった、と当時の新聞 Noticias に記されている。

1868 年の記録もある。8 月 13 日、ナスカと同様、イカの町のほとんどが倒壊した。

さらに古い記録を遡れば、1664 年、1716 年にも、メルカリ震度 9 の大地震が、ナスカを襲ったとされる。こうしたことから、ざっと 50 年～70 年周期で、ナスカは地震の災禍に見舞われていたことがわかる。人が一生に一度、出会うか出会わないかの時間単位だ。何世代も遡るほど希薄な記憶ではない、かといって繰り返しの経験が生かせるほどの時間でもない。人生に一度の経験に、人は恐れおののくばかりだっただろう。

古代ナスカ人は文字を生み出さなかったので、これより古い時代の記録は、残されていない。

しかし、おそらく、古代パラカス人たちが生きていた時代にも、人々は大地震の急襲に恐れを抱いていたはずである。

時代を遡れば遡るほど、被害の大きさは想像もつかないほど悲惨なものであったろう。それは、神の怒りと受け取らざるをえない。何の前触れもなく、ある日突然にやってきて、ささやかな住まいも、畑も作物も、いや家族や自分の命さえ、一瞬のうちに奪っていくのである。天地が割れ、住み慣れた世界が一変してしまう恐怖。これほどの脅威が、他にあるだろうか。

(3)

古代パラカス人たちがパルパからナスカへと移動した理由について、現在のところ最も馴染みやすいのは、乾燥化に伴い、水を求めての移動であったとする考え方である。

しかし、それと同等か、もしかするともっと高い可能性で、地震による災禍から逃れて、ナスカの大平原に渡ったと、考えられないだろうか。全てを失ったあと、もう一度荒廃した土地でやり直すか、あるいは新天地での生活にかけるか。目の前の惨状に恐れをなし、後者に夢をかけたパラカス人も、少なくなかったにちがいない。古代パラカス人の全てがナスカに移動したわけではなく、パルパに留まって、次の時代を生き、文化を築きあげた人たちもいるこ

とが、それを証明している気がする。

しかしながら、南東へと移動したパラカス人を、なおも地震は襲うことになる。「図２」で明らかなように、断層は、ナスカに向かって、えんえんと続いているのである。

そして、さらに驚くことに、パルパの西側及び南東の一帯、またパルパとナスカを結んだ中間地点のパンパ一帯は、ナスカの地上絵が集中して多く描かれているところで、これらの地域と、「図２」の活断層の縦横に走る一帯とが、ぴったりと重なり合っているのだ。

それならば、と私は考える。古代ナスカ人が祈りを託した「ナスカの地上絵」にも、地震の封印への祈りと死者への鎮魂が、込められていたのではないか。

巨大な三角や台形などの幾何学模様を集会所として、人々は、天に祈りを捧げた。生命の水の到来を。そして、地震への畏れを。司祭（祈祷師）が、集会所から長く続く直線を、注意深く辿っていく。呪文を唱え、デモンストレーションを行いながら。やがて、それはナスカ人にとって象徴的な動植物の形に繋がり、祈りは最高潮へと達していくのだ。

たとえば、「図３」のサルの地上絵を見てみよう。なにやら両手に掴もうとしているサルの姿である。サルは水の流れ来るアンデスの生き物を代表する。そのサルから発して、すぐ下にはジグザク文様。さらに下方に、長いプリーツ状の文様が描かれる。プリーツ状のラインは、水の流れを表していると言われているが、それでは、ジグザクはどうだろう？　規則正しい階段状の折れ線は、織物や土器文様にも多々見られるが、サルの地上絵に登場するのは、それとは違う不規則なジグザグだ。地震のあとの津波、と見ることも可能だろう。あるいは、地震のカタストロフィそのものを表現しているのかもしれない。考えてみれば、地震それ自体が、波（地震波）に他ならないのである。

図3　ナスカの地上絵「サル」　　©楠田枝里子

サルの地上絵のみならず、こうした視点で、地震を表すラインを考察するのも、面白い試みとなるだろう。天の怒りを静めるため、まさに荒れ狂う大地に祈りのラインを刻みつけていったことは、想像に難くない。

また、ナスカ最大の神殿であるカワチでも、地震との関わりを観察することができる。カワチは、実は１つの建造物ではなく、十以上もの同様の建物が肩を寄せるようにして作られている。それは世代交代による建て替えと見ることもできるが、もうひとつ、多少なりとも地震によって崩れ落ちた神殿を不運な過去として諦め、新しいものを建て増しして、神の祝福を得ようとしたとも考えられる。

ともあれ、パルパからナスカへと移りながら特有の文化を花開かせたパラカス人に、自然が与えた地震という大きな試練は、今後様々な形で興味深い研究課題となるであろう。

第 12 回大会のアナウンスと発表者募集

2007 年度古代アメリカ学会（総会・研究大会）は、2007 年 12 月 8 日(土)国立民族学博物館において開催することに決定いたしました。今年度の研究大会は、昨年同様、研究発表、調査速報、ポスターセッションを予定いたしております。発表時間・内容は、以下の通りです。

研究発表：30 分間
調査速報：15 分間（2007 年度の春、夏に行った調査の報告）
ポスターセッション：研究大会会場の外で A0(841×1189mm)版のポスター1 枚を用いて行う。

9 月中旬に事務局より、往復葉書または、e-mail（海外在住の方）でご連絡させていただきますので、発表希望者は、研究発表、調査速報、ポスターセッションのいずれを希望するか、及び発表タイトルを記し、事務局までご返信ください。締め切りは、2007 年 10 月 1 日(月)です。なお当日の発表時間は、発表者数により変更になることがございます。ご了承ください。

『古代アメリカ』の原稿募集

会誌『古代アメリカ』第 10 号（2007 年 12 月発行予定）に掲載する原稿を募集します。投稿希望者は、会誌に掲載されている寄稿規定、執筆細目をよくお読みください。論文原稿は、随時募集し、査読を終えたものから（原稿受領後１～２ヵ月で査読終了予定）順次掲載する予定です。

投稿希望者は、編集委員会宛（下記佐藤宛）にメールまたは郵便にてご連絡ください。編集委員会より、「投稿カード」を配布致しますので、これを提出原稿に添付してください。

なお、原稿掲載の可否は、規定による査読結果を踏まえて、編集委員会が決定します。

＊投稿に関する連絡先：
佐藤悦夫
〒930-1292　富山市東黒牧 65－1
富山国際大学国際教養学部
Tel：076-483-8000（内 2227）、Fax：076-483-8008
E-mail：satoh@tuins.ac.jp

役員会報告

- 学会費を二年以上滞納している会員に対しては、会誌および会報の発送は、原則として、滞納会費全額を納入した後に行うことを決定した（承認）。
- 編集委員として、佐藤悦夫会員のほかに渡部森哉会員、佐藤吉文会員を置き、編集委員会補助として浅見恵理会員を置くことに決定した（承認）。
- 会員全員に対して会員情報フォームの記入を依頼し、各会員が承諾した項目に限り名簿に記載することが決定した（承認）。
- 会誌『古代アメリカ』への欧文での論文投稿が承認された。
- 広報委員によって新ホームページの作成が行われ、承認された。
- 新規入会員の入会が承認された。

新入会員

2006 年 12 月 15 日から 2007 年 7 月 20 日までの役員会（メールを含む）で以下の方々の入会が承認されました。会員数は現在 175 名となっております。

- 沢田　麗子（さわだ・れいこ）
- 澤村　慎也（さわむら・しんや）
- 槙本　まゆみ（まきもと・まゆみ）
- 市木　尚利（いちき・なおとし）
- 根木　智宏（ねき・ともひろ）

事務局からのお知らせ

１．会費納入のお願い

2007 年度までの会費が未納となっている方は、同封いたしました振込用紙でお振込み下さい。古代アメリカ学会は会員の皆様の年会費で運営されております。ご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

２．会報への投稿募集

『会報』に掲載する原稿を募集します。研究随想、研究ノート、フィールドワーク便りなどテーマは自由で、字数は 2000～3000 字程度です。締め切りは、5 月末日と 11 月末日の年 2 回となります。掲載の可否については、事務局にご一任ください。

３．会員の落合毅さん、長田善治さん、中森祥さん、浪形早季子さん、吉永史彦さん、渡邊誠さんが転居先不明となっております。転居先をご存じの方は、事務局(jssaa@sa.rwx.jp)までお知らせ下さい。

４．会誌バックナンバー販売のお知らせ

『古代アメリカ』のバックナンバーを 1 冊 2000 円で販売しております。購入をご希望の方は、ご希望の号数、冊数を古代アメリカ研究会事務局までお知らせ下さい。会誌と振込用紙をお送りいたします。なお、第 3 号は品切れとなっております。また他に残部希少の号もございますので、品切れの際はご容赦下さい。

＜編集後記＞

掲載いたしましたように、2007 年 12 月に国立民族学博物館で開催される第 12 回古代アメリカ学会総会・研究大会の詳細が決定いたしました。奮ってご参加ください。

今回の会報には、坂井正人会員と楠田枝里子会員にご執筆いただきました。また編集に際し、事務局の方々にお手数をおかけいたしました。皆様に深く御礼申し上げます。

2007 年 7 月　大平秀一

＜表紙写真提供：大平秀一＞

発行　古代アメリカ学会
発行日　2007 年 7 月 25 日
編集　大平秀一
山本　睦
古代アメリカ学会事務局
〒565－8511 大阪府吹田市千里万博公園 10－1
国立民族学博物館　関雄二研究室気付
電話：06－6876－2151（代表）
Fax：06－6878－7503
E-mail：jssaa@sa.rwx.jp
郵便振替口座：00180－1－358812
ホームページ URL　http://jssaa.rwx.jp/